

ある 唯美 肖像

ウォルター・ペイターの世界

主義者の

富士川義之



富士川義之

ある唯美主義者の肖像

.....
ウオルター・ペイターの世界
.....



青土社

ある唯美主義者の肖像

ウォルター・ペイターの世界

©Yoshiyuki Fijikawa

1992年 8 月30日 第 1 刷印刷

1992年 9 月20日 第 1 刷発行

著者——富士川義之

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町 1—29市瀬ビル〒101

〔電話〕 3291-9831（編集） 3294-7829（営業）

〔振替〕 東京9-192955

印刷所——三協美術印刷

製本所——小泉製本

装幀——高麗隆彦

ISBN4-7917-5204-X Printed in Japan

ある唯美主義者の肖像

ウォルター・ペイターの世界

目次

1 家のなかの子供 序にかえて 7

2 クリスタル・マン 23

3 白の誘惑 39

4 宝石のような焰 55

5 ヴィーナスの変容 73

6 風に吹かれる羽毛 99

7 メドゥーサの魅惑 113

8 モナ・リザの微笑 ————— 127

9 黄金時代幻想 ————— 143

10 ノスタルジアの音楽 ————— 163

11 美の家へ ————— 179

12 アポロンとディオニユス ————— 193

13 架空の人物画像(1) 流竄の神々 ————— 233

14 架空の人物画像(2) 夢想と憂愁のあいだで ————— 259

15 享樂主義者マリウス① 精神の遍歴 277

16 享樂主義者マリウス② 引用の織物 315

17 享樂主義者マリウス③ 華麗な文体 327

18 世紀末的魂と夢 345

注 365

あとがき 375

ある唯美主義者の肖像

ウォルター・ペイターの世界

1

家のなかの子供

序にかえて

ウォルター・ペイターの短篇「家のなかの子供」は、故郷回帰の物語である。

ある暑い夏の午後のこと、散歩をしていた四十代初めの男が、道端で、歩きくたびれている様子の一
人の貧しい老人の荷物をもってやる。老人は身のうえ話を始めるが、たまたまある土地の名を口にする。
そこは、大きな都市の近郊にあって、男が子供の頃、しばらく住んでいた場所だった。その夜、憐れみ
をかけてやった報酬のように、男はその場所の夢を見る。

夢は、いわばより精妙な記憶の役目を果し、夢のなかに出てくるものを大層鮮明に思い出させて
くれ、しかもそれは、時として夢のなかで起こることなのだが、ただの夢よりも、ありきたりの回
想よりも少しばかり高められていた。その場所のあるがままの姿が、とりわけ子供のときに住んで
いた家の様子、ドアや暖炉や窓、その空気の匂いまでもが、眠っている彼のもとをしばらくのあ
いだ離れなかった。ただ、壁や床の色調は、実際よりも一層音楽的に混じり合い、家の方々にある
曲線や角に沿って流れ出ている光と影のこまやかさも、ささやかな彫りものすべての優美さも、実

際以上であつた。彼は目を覚ますとため息をついた。自分とその場所とのあいだにはほぼ三十年のへだたりがあることに思ひいたつたからである。しかし、まるでほえんでいるかのようなあの清らかな光は、ぞくぞくする快感を伴つたまま、まだ体内にとどまつていた。

こうして、フローリアン・ディリールと名づけられたその男は、このような夢を見たことを契機にして、その当時もくろんでいたある計画、すなわち現在の自分を形成した魂の自伝の一部を書きとめておこうと決意する。そうやって書きとめられたのが「家のなかの子供」という短い物語にはかならない。

この短篇は一八七八年八月、『マクミランズ・マガジン』誌に発表された。初出時には「架空の人物画像 一、家のなかの子供」と題されていた。ペイター三十九歳のときの作品である。年齢的に近いということもあつて、フローリアンはしばしばペイターの分身的人物として見られている。つまり「家のなかの子供」は、五十五年の生涯を通じて、自己を直接語ることにすこぶる禁欲的だったペイター唯一の、なかば自伝風な作品である。自伝風と言うのは、フローリアンがほぼ三十年前に住んでいた場所や家が、ペイターが一八四二年から五二年まで過ごしたロンドン近郊の村エンフィールドでの生活を背景にして創造されたのではないかと推察されるからである。

ここで伝記的事実に少し触れておく。ペイターは一八三九年八月四日、ロンドン東部のスラム街ステップニーで生れた。父親はその街で貧民相手に医療を開業していた。夜になると、付近は貧民や浮浪児が寝場所を求めて徘徊するという劣悪な生活環境であつたという。他者の苦しみや貧しさに同情を寄せずにはいられぬという、後年のペイターの性質は、このような環境のもとで嫌な顔一つせずに働いて

いた、名利に薄く、控え目で、慈悲心に富んでいた父親譲りのものであったといわれる。一八四二年一月、ペイターがまだ三歳半のとき、父親が脳障害のため急死する。享年四十五歳だった。ほとんどまったく記憶に残っていない父親をペイターは終生敬慕し、死後四十七年経った一八八九年に、詩人ライオネル・ジョンソンに向って、父親の話をいろいろと語ったことが知られている。しかし、肝腎のその話の内容を詩人は書き残していない。⁽¹⁾したがってペイター自身がどういふ話をしたのか知るよしもないのだが、ともかく失われた父、不在の父のイメージを求めて、というのは、ペイターの人生と文学をつらぬく根深い衝動であったように思われる。

エンフィールドへの一家を挙げての移住はその父の死を直接のきっかけにしている。現在はロンドンへ通勤する中流階級層のベッドタウンとして発展しているが、当時はまだ森や丘の麗らかに広がる牧歌的風景に取り囲まれた小村にすぎなかった。ちなみに言うところ、ペイターが強い精神的結縁を感じていた『エリア随筆』の作者チャールズ・ラムがエンフィールドをことのほか愛し、そこに一時瀟洒な住居を構えていたことがあった。こうしてペイターは、十四歳近くまでは十年間エンフィールドの「古い家」で生活し、その土地について終生消しがたい記憶を刻み込んだのである。

十二歳のフローリアンは最後に「古い家」を立ち去り、別の土地へと移って行く。同様に、十四歳のペイターもまた、エンフィールドを離れ、キングズ・スクールに入学すべくカンタベリーへと赴く。もちろんフローリアンを直ちに、何の留保も付すことなく作者自身と見なすことは軽卒にすぎないが、このような生活と作品とのあいだの微妙な照応関係は、その独特の繊細優美な文体のモザイクを通じて、フローリアンがペイターの内面生活の細かいひだを喚起させるべく創造された一種の分身的人物として見

えてくるといふ印象を与えずにはないだろう。ともあれ、フロリアンにとっても、ペイターの場合でも、あるいはおそらく誰にとってもそうであるように、故郷とは、その外へ出て行くことによつてはじめて故郷となり得るというイメージで思い描かれたのだった。そして故郷離脱の長い時間的経過が故郷回帰への欲望を一層つのらせるという共通性を、フロリアンとペイターは分かあっている。

注目すべきは、ペイターが、フロリアンのみにとどまらず、代表例を挙げると、たとえばエメラルド・アースワート、アントワヌ・ヴァトー、ジョアシャン・デュ・ベレ、マリウスなどといった、実在架空を問わず、故郷に回帰していく人物をたびたび描き出していることである。これは故郷回帰ということが、ペイターの想像力を特徴づける重要な型となっていることを窺わせるが、実際、この文学者は、回帰するということに絶えずとらわれていた人間だった。回帰という型をつねに内在させている人間だったのである。古い過去への、歴史へのノスタルジックな感覚の働きが、ペイターの主要作品には浸透しているが、その根柢には、故郷回帰の衝動が存在していることに気づかないではいけない。『ルネサンス』の「ジョアシャン・デュ・ベレ」の章には、軍隊を追放されて若い命を終えるエメラルド・アースワートと同じく、死ぬただけに故郷へ帰って行くような、十六世紀フランスのプレイヤード派の詩人デュ・ベレの肖像が丹念に描かれている。彼は枢機卿に随行してローマに赴き、そこに五年ほどとどまって、重い仕事に煩わされ、ホームシックに苦しんだが、このような環境のもとでその華麗な才能の最上の果実を実らせたのだった。そしてこの若年で死んだ詩人の故郷へのノスタルジアを、ペイターは次のような詩的喚起力の強い言葉で描いている。

堂々たるローマの眺望から、彼の思いは絶えずフランスへと戻っていった。故郷の村の煙たなびく煙突へ、北国の長い黄昏へ、温和なアンジューの風土へと戻っていった。けれども、それは、暗い街路と荒削りのスレート屋根の現実のフランスではなく、むしろ、現実以上に塔はすらりと高く、川は曲がりくねって流れ、木々は花のようで、柔らかな陽射しが優雅に調和のとれた畑や道にそそがれている、もう一つの国であつたに違いなく、その国は、流浪者や、巡礼や、家郷を遠く離れた生徒や、意に反して家にとどまっている人たちが、いたるところで未来や過去に作り上げる空想の国にほかなるまい。

故郷回帰の衝動とは、ペイターにとって、現実の故郷自体というよりもむしろ、ノスタルジックに夢見られた「もう一つの国」、ないしは「空想の国」を作り上げるといふことと分ちがたく結びついていた。ノスタルジアと言っても、それは、曖昧な感傷的気分にひたりきるといふことを意味していない。むしろそういう自己陶醉を厳しく斥け、明晰な知的認識によって、漠然とした気分的な耽溺を相対化してゆくこと、そこに故郷回帰の夢を精密化していくペイターのノスタルジアの本質が見出されるのではないかと思う。そのような意味合いで、ペイターという文学者は、何よりもまず、ノスタルジックな感覚の働きに知的操作をほどこし、記憶の精妙な作用に鋭敏な触手をのばしていった人間ではなかったろうか。その点でブルーストやナボコフといった、自己の内的生活、とくに記憶の世界に深く根ざす時間の形而上学を築いた作家たちを時おり想起させずにはおかないほどだが、これら二十世紀作家と同じく、ペイターもまた、想像力が織りなす別世界への憧憬や渴望を作品創造に不可欠な跳躍台として活用して

いったのだった。そうした想像力の構造への関心が、このペイター論を書きついでいくうえでの道標となってくれることを願っているが、「家のなかの子供」は、半自伝的作品という性質を多分に帯びているゆえに、ペイターの文学的感性の基盤をより鮮明に読みとることのできる作品ではないかと思われる。この半自伝的作品は、ペイターの小説、批評、散文の多くを解き明かささまざまな重要な鍵を内包させている短篇と言つてよいからだ。制作年代順ということを無視して、「家のなかの子供」を敢えて最初に取り上げたのはそのためである。

ところでペイターは、フロリアンを通じて、自分の魂に深く根ざす故郷憧憬を形象化しているように見えるのだが、故郷感覚ということについてペイターは次のように書いている。

それからというものの、フロリアンには、故郷感覚が並々ならず強くなった。まことに幸運なこと、ほかならぬ彼の故郷特有の性質が、それ自体ほんとうに故郷らしい故郷ということであった。各地を遍歴してきたあと、わたしは、サリー州とセント州の一部こそが、イギリス人にとってほんとうの自然の風景であり、ほんとうの故郷であると思うようになってゐる。それは一つには、はりえに、しだのやぶの下の黄色い砂の土臭い温もりや、その丘のくぼみにたなびく雨あがりの灰色がかつた青みを帯びたもやのせいである。このもやは疲れた眼に心地よく、ここからさらに南へ行つてもどこにも見られない。したがつてわたしが語つてきたような家、赤い煉瓦と緑の木の葉がびつたりと釣り合い、和らいだ秩序のなかにかすかな単調さのある家は、その特徴的な調べのゆえに、少くともイギリス人にとって、典型的に故郷らしい故郷なのである。それゆえフロリアンは、

さまよっていた自分の魂が、たまたま地上の仮住まいとしてとどまるにいたったこの場所がとりわけ故郷らしいところであったので、あの誰にでも認められる人間的本能を強めていったのだった。彼の魂と、それを取り巻く物質的環境との調和の感覚は、少くともしばしのあいだ、完璧に演奏された音楽のようになり、そこで送った生活は並外れて静謐で、不思議な落着きの感じにみたされていた。

故郷というのは、つまるところ、心身の平静、魂の平安をもたらすいわば窮極の場所として夢見られ描写されている。この故郷が、幼少年時代を過ごしたエンフィールドでの生活をこだまさせていることは確かだとしても、むしろその村と等価ではない。それは「サリー州とセント州の一部」がそうである。語り手が述べるような、イギリス人にとっての「ほんとうの故郷」と重ね合せて提示されているのである。そういう、一種の黄金郷としての精神的故郷を心のどこかで希求し、その希求をさまざまな文学形式のなかに投影させていったのが、ペイターではなかっただろうか。

フロリアンは故郷感覚といい、家の意識と言う。彼の自意識は、その「古い家」での生活のなかで芽生えていったが、家は少年に幸福と平安をもたらし、外界の侵入から安全に保護してくれる大きな容器に等しいものとなっている。少年の魂の静けさは、その家、「閉ざされ」「封じられ」た場所の静けさと同じものであったという箇所が見出せるが、つまり少年の魂は完全に家や場所の一部と化してしまっている。「内的なもの」と外的なものとの互いに幾重にも織り混ぜられて、解きほぐしがたい織物になってしまっていた」のだ。チャールズ・ラムについてのペイターの評言を借りるなら、フロリアンは